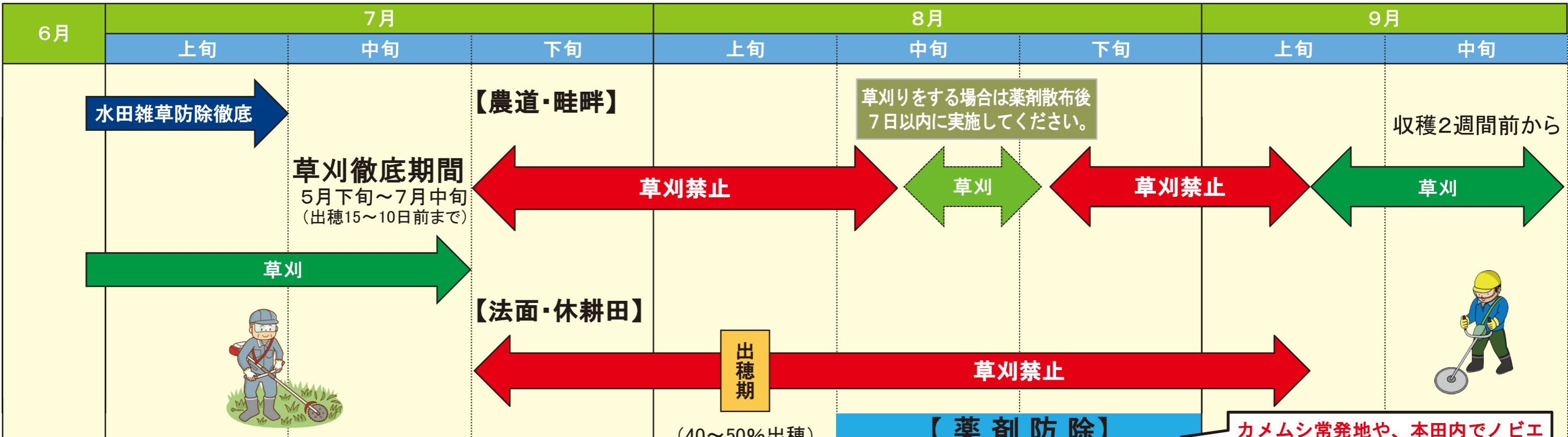


斑点米カメムシ類の発生に注意！8月の薬剤散布にあわせて草刈を！

稲の生育ステージにあわせた適期防除を！！



斑点米カメムシ類主要種

【アカスジカスミカメ】
 好む草種

(タイヌビエ) (イヌホタルイ)

成虫は体長4.6～6mm、背側中央部に紅色の条を有し、触角及び脚は紅色である。卵越冬、飛翔性、年3～4回発生する。イネ科雑草やホタルイ等の雑草の穂に産卵するが、稲にはほとんど産卵しない。

【アカヒゲホソミドリカスミカメ】
 好む草種

(スズメノテッポウ) (スズメノカタビラ)

成虫は体長5～6mm、幅1mmの細長い緑色で触角及び脚先端は淡紅色である。卵越冬、飛翔性、走光性、年4回発生する。水田内では出穂期頃から成虫が侵入し、稲の葉鞘に産卵する。

【薬剤防除】

1回目防除 (出穂期10日後頃)
 スタークル粉剤DL
 スタークル液剤10
 アルバリン粉剤DL
 スタークルメイト液剤10

2回目防除 (出穂期24日後頃)
 エクシード粉剤DL
 エクシードフロアブル
 キラップ粉剤DL
 キラップフロアブル

カメムシ常発地や、本田内でノビエやホタルイの雑草発生ほ場では、出穂期10日後頃と、同24日後頃の2回防除が必須です。

【斑点米の加害部位と加害時期について】

加害部位	頂部	側部	割粃
加害時期	登熟期前半	登熟期後半	
	出穂期10日後頃の防除がポイント！	出穂期24日後頃の防除がポイント！	



アカスジカスミカメはイネ科やカヤツリグサ科の雑草に産卵します。水田内にノビエやホタルイ等の雑草が発生しているほ場では、適期を逃さず、中・後期剤により除草を徹底しましょう！

また、出穂15～10日前までに、斑点米カメムシ類の繁殖地となる農道・畦畔、休耕田等の除草を、地域一斉に行いましょう！

斑点米カメムシ類の防除薬剤

適用場所	分類	薬剤名	濃度	10a当り散布量	10a当り散布液量	散布時期	本剤の使用回数	備考
本田	1回目	粉剤	スタークル粉剤DL	—	3kg	—	出穂期10日後頃	3回以内 (1)薬剤は畦畔を含めて散布する。 (2)スタークルとアルバリンは同じ農薬成分なので農薬成分の散布回数に注意する。
		粉剤	アルバリン粉剤DL	—	3kg	—		
		液剤	スタークル液剤10	1,000倍	150cc	150ℓ		
		液剤	スタークルメイト液剤10	1,000倍	150cc	150ℓ		
	粒剤	スタークル粒剤	—	3kg	—	出穂期7～10日後	3回以内 (1)3～5cmの湛水状態で均一に散布し、4～5日間入水しない。また、散布後7日間は落水・かけ流しはしない。 (2)ホタルイ類等のカヤツリグサ科雑草やノビエが多く、本田に侵入してくる成虫が多い場合は、液剤・粉剤で防除する。 (3)散布時期が早いと効果が劣る。 (4)処理後の多雨・低温・寡照条件では、効果が劣る場合があるので散布時期を厳守する。	
		アルバリン粒剤	—	3kg	—			
	2回目	粉剤	エクシード粉剤DL	—	3kg	—	出穂期24日後頃	2回以内 (1)薬剤は畦畔も含めて散布する。 (2)1回目散布剤との連用を避けるため、2回目の防除薬剤はエクシード剤かキラップ剤とする。
			キラップ粉剤DL	—	3kg	—		
液剤		エクシードフロアブル	2,000倍	75cc	150ℓ			
		キラップフロアブル	2,000倍	75cc	150ℓ			
休耕田	スミチオン粉剤3DL	—	3kg～4kg	—	雑草の生育期	4回以内 休耕田等の雑草放任地に対する殺虫剤の散布は、薬剤の到達を良くするため草刈り後直ちに行う。		
	スミチオン乳剤	1,000倍	100～150cc	100～150ℓ				

病害虫発生予察情報(令和6年6月25日 秋田県病害虫防除所発表より抜粋)

葉いもちの全般発生開始期はやや早い、発生量は平年並と予想されています。余り苗は直ちに処分し、余り苗や感染苗の持ち込みからの伝染を確認した場合は速やかに防除してください。

斑点米カメムシ類の発生時期は早く、発生量は多いと予想されています。水田内に雑草が多発すると、アカスジカスミカメの水田内への侵入が助長されるため、中・後期除草剤の使用にあたっては、ほ場の発生雑草の草種や生育程度を観察して、適切な薬剤を選択してください。

主要病害虫の1か月予報

病害虫名	発生時期 感染時期	発生量・感染量	
		現況	予報
葉いもち	やや早い	—	平年並
紋枯病	早い	—	多い
稲こじ病	やや早い	—	やや多い
斑点米カメムシ類(第2世代)	早い	多い	多い
・アカスジカスミカメ	早い	多い	多い
・アカヒゲホソドリカスミカメ	早い	多い	多い
コバネイナゴ	—	—	平年並

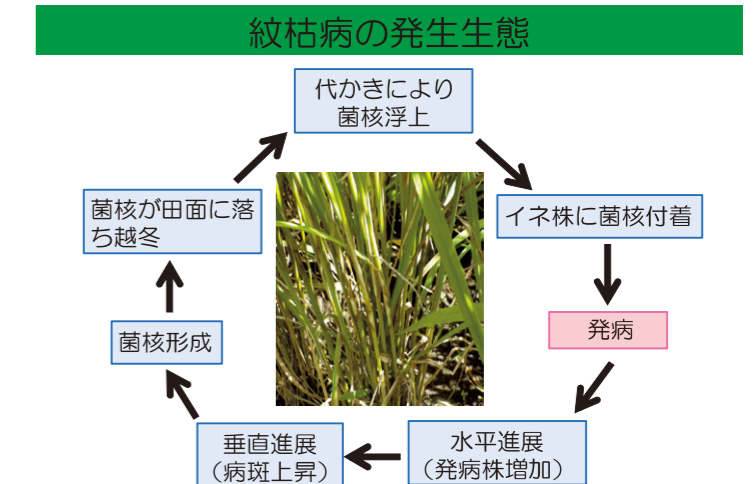
※BLASTAM法による感染好適判定(県内24アメダス地点)では、6月23日までに全県的な全般発生をもたらす感染好適な条件は訪れていないと判断されています。

紋枯病の防除対策

紋枯病は前年に発病した病斑の菌核が水田内に落ちて越冬し、その菌核が7月下旬に稲株内の茎に付着して発芽し、茎内に侵入して徐々に茎の上部に病斑が伸びて行きます。また、出穂の早い年や出穂後高温多湿の気象条件では上位の葉鞘(ようしょう)まで病斑が進展しやすいので、菌密度が高いほ場では特に注意が必要です。

穂ばらみ期～出穂期の発病株率が15%を超える場合は減収のおそれがありますので、出穂直前～穂揃期に茎葉散布剤による防除を行います。

粒剤の散布時期は茎葉散布剤よりも早く、発病を確認する前の防除になりますので、前年多発したほ場に限り、出穂15～5日前にリンバー粒剤、または出穂20～10日前にモンガリット粒剤で防除を行います。



	農薬名	散布時期	散布量(10a)又は希釈倍数	備考
茎葉散布剤	バシタック	出穂直前～穂揃期	粉剤・DL: 3～4kg 液剤: 1,000倍 ゾル: 800～1,000倍 水和剤: 1,000倍 フロアブル: 1,500倍	(1)出穂直前の防除に重点をおく。 (2)多発が予想される場合は出穂以降にも散布する。
	バリダシン			
	モンカット			
	モンセレン			
水面施用剤	モンガリット粒剤	出穂20～10日前	4kg	(1)使用は、前年多発したほ場に限り。
	リンバー粒剤	出穂15～5日前		

農薬は適正に使用しましょう!!

- ・ラベルを確認して使用基準を守ろう。
- ・農薬の飛散(ドリフト)に注意!
- ・農薬使用後はきちんと後片付けを!

